

演題19

顎関節症の臨床的診査に応用する 顎関節雑音の採取方法の検討

○岡崎雅子・平井志都子・森主宜延・小椋 正
(鹿大・歯・小児歯)

過去の疫学的調査から、顎関節症の予防管理を行なう上で適切な時期は中学生であること、そして、マス・スクリーニング上鍵となる症状は顎関節雑音であることが報告されている。そこで、顎関節雑音の客観的診査法を確立するための音響分析を試みる第一歩として、今回は顎関節雑音の臨床的採取方法について検討したので報告する。

対象および方法：鹿児島大学歯学部学生および医局員で顎関節に器質的異常のない者を対象とした。実験装置として、コンデンサーマイクロホン、増幅器、データレコーダおよびソナグラフを使用し、顎関節雑音の採取部位による相違、外音防止用エアマフの装着による影響および再現性から検討した。

結果：採取部位による比較において、外耳道部から最も安定して明瞭な記録が得られ、この部位が顎関節雑音記録部位として最適であることが示された。外音防止用エアマフを装着すると基線のゆらぎが増大し、ノイズ様の波形の出現する例がみられた。また、クリック音では再現性が認められたが、捻髪音では波形および周波数の評価から安定しないことが示された。